

通勤路に沿って

猪原安子

私の住まいは西深津町にある。ここから、毎日飽きもせず、否、飽きてしまっているけれどほとんど習慣のように井原まで通勤している。

福山向けの渋滞を横目に渋滞がないのがせめてもの慰めと言ったところか。この通い慣れた道沿いにも歴史的なものが幾つもあるのだろう。

思えば古来人々が生活して来たのだから、どこをどう通ろうともいたるところ全て歴史背景のないところはない。町の姿が変わり、住む人も変わり、色々なことが忘却の彼方に押しやられようとも確かに先人たちは歴史を生きて来たのだ。改めて、日常は何げなく通っている道沿いにもんなものがあつたか眺めてみよう。

まずは、出発地点、西深津町から。西深津町と言う町名は随分新しく、その前は今の東深津町と西深津町とを併せて東深津町と言っていた。

そのころ私は東深津町と言うのはどこに對して「東」と言うのだろうかと思つたことがある。少し前のことを知っている人から見れば、こんな事は殊更に言うほどのことではないだろう。そうは言つても、深津町

(ふかつまち)が城下町の名残をのこす米屋町・鍛冶屋町などと合わせ、て宝町と称されるようになったのは昭和四十年、それから二十五年余り

の歳月が流れている。深津町という町名をほとんど耳にする事なく育つて来た者が、大人になつていてのだから先のような疑問も湧いて来ようというものだ。さてその東深津が對するところの深津町の由来はと言えば、福山城の城下町が造られるときに深津村より移つて来た人々が住んだから深津町と言う。その深津村こそは今言うところの西・東深津なのであるが、昭和八年深安郡より福山市に合併されるに当たつて、旧深津村は城下にある深津町に對して東深津町とされたのである。

そもそも深津と言う地名は古いものであるらしい。古代においては、字面から推測されるとおり、こちら辺りが港であつたが故に「深津」と呼ばれたと言うくらいだから、つまり古代からこの地名があるということだ。まさに母校深津小学校校歌の言う「遠い歴史の夢の跡、深津の丘」である。深津高地が半島のように深津湾に突き出していたのだ。普段は過ぎ去つた時の彼方に思いを馳せる間もなく、あわただしく出勤する。深津の港では奈良時代には市が立ち、市村と呼ばれて栄えたという。そのことをうかがわせる市村という名も私には耳にしたものではなく、目から入つてきた「昔の」地名なのである。

車は南蔵王町から一八二号バイパスに乗って蔵王町へ入る。福山東イ
ンターを過ぎると、よく見えないが右手に池がある。またすぐ今度は左手
に池が見える。この二番目の池が「千塚池」だ。その名のとおりこちら
辺りには、多くの古墳群があると言う。古墳は首長の墓なので、一族の
ものにとっては聖なる地であり、神として祭られ神社として残っていく
例は多い。そう思っで見れば、この池のところのバス停は「天神前」で
ある。(ただし、この天神さんが古墳に由来するかどうかは私は調べて
いない。)

千塚池からしばらく走ると神辺第一陸橋である。ここまで来る間、福
山向けはあきれほどの渋滞である。そろそろとノロノロと車の行列が
続く。一つ手前の信号を左折すれば、旧山陽道であるが、そこは対向車
の多さに圧倒されるので避けておく。一八二号バイパスを下りて三二三
号に乗って神辺の町のほうへ向かう。神辺と言えば本陣であるが三二三
号は神辺の町・神辺本陣を通らない。

神辺駅のところからバス停は神辺駅前・神辺川北・神辺高校前・古城・
神辺古市と続く。「川北」は高屋川を境に麓村を分けて川北村・川南村
とした名残なのであるが、川北荘と言えば中世に芦田川の北部地域に
造成された荘園であり、今の神辺一带を含めた地域であった。川北荘の
中心部は神辺川北であった。さらに三二三号を走ると御領であるが、こ
ともまた荘園であった。だがしかし、そうすぐには御領まで行かない。
神辺川北のバス停のところ、信号の右手にあるのが天別豊姫(あまわけ
のたとひめ)神社だ。この神社は平安時代、西暦九二七年に完成した

「延喜式」の神名帳に載せられているという。もともと神社はその土地
の人々が祭っていたものであって、極めてローカルなものなのに、中央
の権力はその勢力の拡大と共に地方の神社をも支配統制していく。天別
豊姫神社も延喜式に記載されているからには、中央の統制に取り込まれ
たということだ。そんな訳で神社にも位階が授けられ、天別豊姫神社は
従五位上に叙せられている。

この神社の後方、黄葉山一帯に広がるのが中世の山城、神辺城跡だ。
神辺城は建武元年(一三四四年)建武新政府より備後の守護職に補任さ
れた朝山景連が築いたと伝えられている。神辺城はまた、元和五年

(一六一九年)水野勝成が備後十萬石領主として入封したときに入城したと
ころでもある。そして、深津は水野藩の干拓事業によって新田となった。
国道二号線沿いのバス停を見ると、王子町から明神町にかけて千間土手
西・千間土手中・千間土手東というのがあがるが、このときの干拓事業に
由来する。神辺城から深津の方へ戻ってしまったが、続いて井原へ向か
おう。バス停の古城まで来てしまうと城は既に後方にある。次なるバス
停は神辺古市。文字どおりここは中世神辺城下で市の立ったところであ
り、神辺の町にかけて七日市・三日市・十日市の名を今に残している。

高屋川を渡って大きく右にカーブしながら下ったら、備後国分寺が近
い。国分寺は言うまでもなく天平三年(七二二年)聖武天皇の勅命によっ
て全国的に建てられた国分寺の一つである。六世紀半ばに朝鮮半島を経
て中国の仏教が入って来た時この外来の宗教はまず最初に支配者階層の
あいだに入って来た。このころの支配者階層の人々にとっての仏教は自

分たちを幸福にしてくれるものであり、また国をも守ってくれる鎮護国家のための仏教であった。だから奈良時代、東大寺を建立し、大仏を造り、各地に国分寺を建てたのも宗教としての仏の教えを広めるといふよりも、中央政府の権力の何たるかを仏教の威力によってあまねく知らしめんがためであった。仏教建築物は統一国家のシンボルであったのだ。まだ貴族も草葺きの家に住む時代、瓦葺きの建物の庶民に与えた印象は如何ばかりか。威力充分である。

御領の一里塚を過ぎればもうすぐ県境。井原市高屋町である。高屋には近世山陽道の宿駅がおかれていた。先に通ってきた一里塚は江戸時代に山陽道が整備されるに当たって旅人の目印と休息場にと設けられたものなので、当然一里毎にあるわけで、手前は平野、後は高屋の宿を越えて下出部（しもいずえ）と東江原の青木と続いていたのだ。けれども、三―三号を走るときには御領の一里塚だけが信号機に下げられた地名の札のおかげで、ここに一里塚があったとわかるのみだ。宿場は、神辺・高屋・七日市・矢掛と続く。福山・神辺に住むものは本陣といったら神辺本陣を思い、井原あたりで本陣といったらまず矢掛を思い浮かべるだろう。それにしても、どこを走るにしても新道とかバイパスを通るので町らしい町は目に入らない。神辺・高屋そして出部、旧道を通るのは旧道沿いに用のあるときだけだ。出部まで来れば会社までは五分もかからない。薬師の交差点を左折して、東南田、北ン田と交差点を過ぎればもう到着だ。

薬師のところはいつもNTTのところと書いていて、つい先日までは

薬師という文字が目にはいつていなかった。目には入っていても全く気にとめていなかったと言えば、東南田の三差路のところにある善福寺だ。お寺は少し奥まっであるのだが、三―三号沿いでかかど「善福寺」と書いてある。ここは足利三代將軍義満が祖父に当たる足利尊氏の冥福を祈って建てたと言われている。將軍義満は、南北朝合一を実現させ、また金閣を建てたり、いずれにしても私個人とは全く無縁の歴史上の人物だが、こんなに身近に縁の寺があるとなれば俄然興味がわいて来る。

仕事で井原近辺をうろろすることも多い。バス停の名や、いろんな案内板を見ると結構おもしろい。「高越城」と書いて矢印をつけた案内板もあるし、「与一扇的」と書いた大きな看板は饅頭屋のコマーシャル。「ここは宿場町、ゆっくり走ろう矢掛町」というのもある。史跡にはほとんど行ったことがないが、聞き覚えのある名称を見て、どことは分からないまでもこの辺にあるのだなと思ってしまうと見まわしてみたりもする。つい先日矢掛の南部、横谷というところへ行った。その途中「小迫大塚古墳三〇〇m↓」という小さな立て札を目にしては、ここにも古墳があるのかと驚いたりしている。そのときに洞松寺のそばも通ったが、あとで少し調べたら、天智天皇の時代に奈良興福寺の光照菩薩を請来して堂宇を建立したのが草創だということだった。矢掛の寺までその縁起は知る由もないが、さりとて自分の住む町内のことも知らないことばかり。もともとここに先祖の代から住んでいるのでないし、「昔は……」という年配の人の昔語りを耳にした覚えもあまりないから仕方ないのかもしれないが、足元をすくわれるようで心もとない。

ともかく、通勤路沿いだけでなくあちこちうろろすることがあるが、目にするものすべてそれぞれに歴史の中にある。ほんの少しでもその由来などを知ると、全く気にかけていなかったものさえ、一挙に近しいものに思われてくる。

(一九九〇・九・一五)